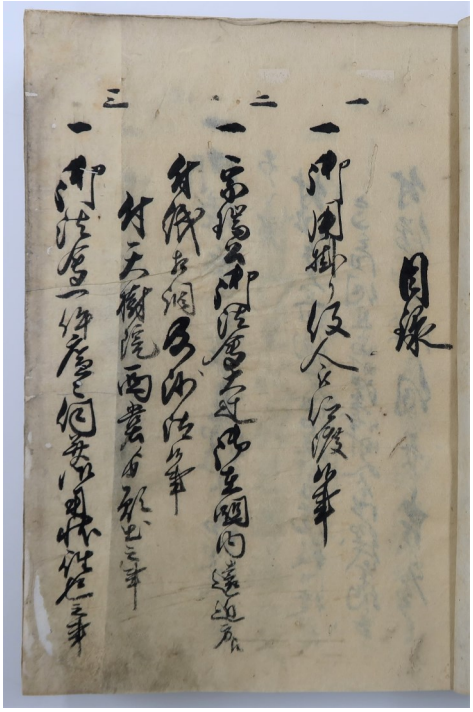
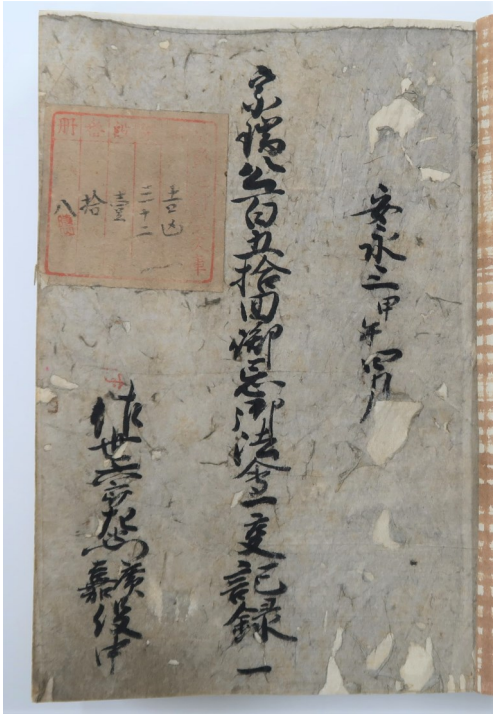
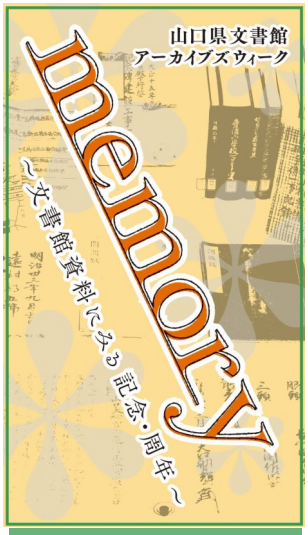




「宗瑞公百五拾回御忌一事記録」より表紙と目録冒頭（毛利家文庫46吉凶10(30の1)）



7

その日 ❷

安永3年4月輝元150回忌法要

《毛利輝元の菩提寺天樹院》

毛利輝元(宗瑞)は寛永2年(1625)4月27日、萩で73年の生涯を終えました。死後、隠居所であった萩の四本松に菩提寺天樹院が建立されます(臨済宗南禅寺派)。寺社隠密書寄(毛利家文庫12寺社11)によれば、同寺は天和2年(1682)の堀内大火で焼失し、貞享3年(1686)から桜江の隆景寺を天樹院と改め輝元の位牌を安置します。そののち宝暦7年(1757)7代藩主重就が四本松への天樹院再興を決めたといいます。明和2年(1765)6月、完成した天樹院本堂に位牌が移されています(「天樹院殿三拾三回並百五拾回御忌記録」同46吉凶8)。

《輝元150回忌法要》

安永3年(1774)4月23～27日の5日間、天樹院で輝元の150回忌法要が営まれます。この法要に関しては、「宗瑞公百五拾回御忌一事記録」(上写真)などの記録が毛利家文庫に残っており、そこから法要の具体像が明らかになります。

この法要は、延宝2年(1674)の50回忌法要、享保9年(1724)の100回忌法要と比べ、大規模に営まれたことが特徴です。重就の事績をまとめ、その功績を強調する書「御国政再興記」には、輝元150回忌法要およびそれに先立つ明和7年(1770)の元就200回忌法要が「先規よりも段々御念を入れられ候事」とあり、重就の意向で法要が大規模に営まれたことが力説されています。

《法要日数と法華経講読数》

法要の大規模化は、まず法要の日数および講読される法華経の数に現れています。50回忌法要は4月22～27日の6日間で法華経8巻が1000部(1000回)講読され、終了後に満散の能が行われました。しかし100回忌法要は、当時の幕府倹約令に従い、4月24～26日の3日に短縮され法華経講読も300部に止まりました。27日の満散は御囃子でした。

これに対し150回忌法要は、まず21～23日に萩城内の霊社で祭式が執行さ

御国政再興記
(毛利家文庫11政理
63～65)

重就の諸政策が、藩政・財政の立て直しに功績のあったことを力説した書です。家臣からの批判が強いなか、重就の政策意図、正当性を主張し批判に反論するため、安永8年(1779)に「第一」が、天明2年(1782)に「第二」が編纂されました。「第二」がより「自己弁護的」内容と評されています（河村一郎「『御国政再興記』のこと－長州藩の宝暦改革－」）。

れ、続けて天樹院で5日間の法要が行われました。法華経講読数は表向き300部とされたものの実際は500部講読されました。満散では能が演じられています。参加僧侶は160名、これも100回忌の120名より増えています。

《法要参列者枠の拡大》

より注目されるのは法要参列者枠が拡大されたことです。100回忌法要は焼失後移転した寺で営まれましたが、手狭なため輝元との由緒が深い家筋の家臣13名のみが「寺詰」(寺への参列)を認められました。これに対し150回忌法要では、天樹院が再興されたこともあり、参列者拡大の方針が採られました。

法要の前年、担当者である藩士香原弥右衛門は、「今回の法要では、藩は輝元公との由緒を申し出た者は詮議の上で参列を認めるとしている。輝元公との由緒を示す文書を所持している者は積極的に申請すべきである。そうでなければ各家で文書を持ち伝えている意味がない」と言い、担当役所から家臣に対して積極的な申請を促すよう伝えています。

また、藩内の百姓・町人にも広く参加が呼びかけられました。安永2年には百姓・町人ら90名が法要参加の願書を藩に提出しています。願書には各家と輝元との由緒が記され、根拠となる古文書の写しが添付されました。希望者は萩町人、各宰判の大庄屋・庄屋が多く見えます。

法要には、寺詰を認められる者、焼香のみ認められる者、御供えを奉納できる者、御斎を振舞われる者、満散の能の見物を許される者など参加のあり方はさまざまでした。藩は輝元と各家との由緒を元に「家筋判断書」を作成し、法要への参加形態を判断しました。

《藩主重就の意図》

輝元150回忌法要および元就200回忌法要を大規模に営んだ藩主重就の意図はどこにあったのでしょうか。

重就は6代萩藩主宗広の急逝により、長府藩主から毛利宗家を継ぎ、宝暦元年(1751)7代萩藩主となります。宝暦検地や財政の立直しなどを進め、後年「中興の祖」として評価されています。一方、その治世下には一門をはじめ重臣たちとの激しい対立があり、重就の政策に家臣らの強い批判があったことも指摘されています。

「支藩主から宗家へ入った殿様」重就にとり、藩内での権力基盤の強化、自らの政策の正しさを主張することは、一貫した課題でした。重要な毛利家祖先の年忌法要を大規模に営み、参加者枠を拡大し、より多くの家臣・領民を法要に参加させることで、毛利家さらには重就への求心力を高める効果を期待できます。法要をきっかけに、毛利家との関係を再認識させるとともに、広く参加を認めた重就への好評価、支持も彼らから得られるでしょう。重就の意図は、ここにあったのではないかと考えられるのです。

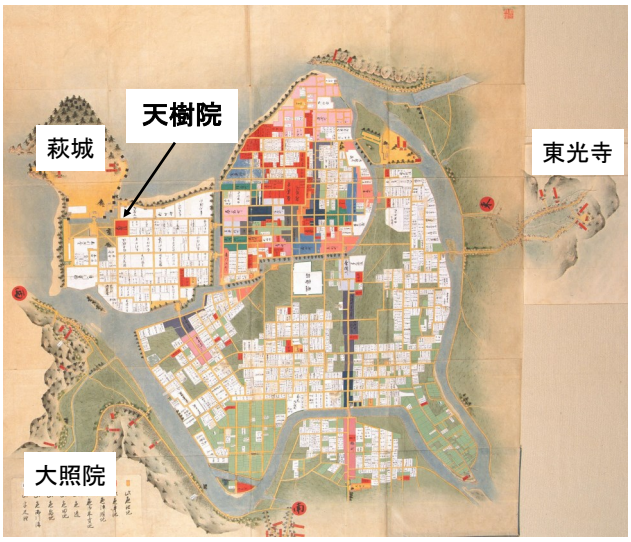


図1　天樹院の位置

（慶応元年「萩城下町絵図」毛利家文庫58絵図414）

天樹院は萩城にほど近い堀内の四本松に位置していました。元治元年(1864)に広厳寺と改称、明治4年(1871)現在の大照院に合併し廃寺となりました(平凡社『山口県の地名』)。

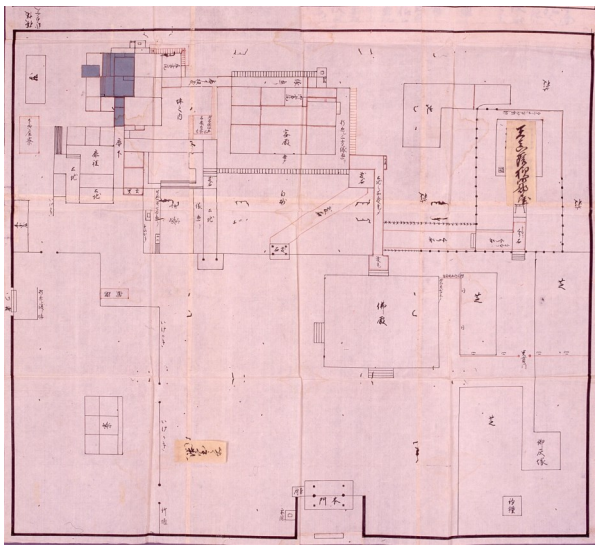


図2　天樹院内の配置図

（「天樹院御寺惣差図」毛利家文庫58絵図1090）

年欠の図面ですが、「天真院様御部屋」との付紙があります。天真院は文化12年(1815)死去の重就側室であることから、本図は再興後の天樹院を示すものと考えられます。